

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 生まれ育ったコキョウを訪れる。
- 2 算数のキホン問題から取り組む。
- 3 冬に向けてマフラーをアむ。
- 4 コクモツが値上がりする。
- 5 鉄道の駅舎が新しくなる。
- 6 俵にお米を詰める。
- 7 北海道で流氷を見に行く。
- 8 円すいの体積を求める。

問二 以下のひらがなを漢字になおして、1から3は対義語を、4から6は類義語を書きなさい。

なお、 の中のひらがなは一度だけ使い、漢字一字を書きなさい。

- 1 生産 消()
- 2 単一 ()合
- 3 革新 伝()
- 4 重宝 ()利
- 5 実質 内()
- 6 使命 ()命

どう	む	さん	そう	ひ	にん	い
べん	ふく	よう	まん	とう	えい	

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これは、とある農村での話である。この村の住民はそれぞれ、自宅でウシを飼っていた。ウシたちは、村共有の牧草地で放牧され、草を食^はんで暮らしていた。村人は、ウシの乳をしばったり、ときにウシを市場に売ったりしてくらしの足しにしていたのである。こういう状^{じょう}況^{きやう}がながく続き、村人たちの生活は安定していたのだが、ある日、知^ち恵^えのはたらく村人が、自分の飼^かうウシの数を増やすことにしたのである。子ウシを何頭も買ってきて共有地で放牧し、大きくなったら売りさばく。こうしてこの村人は成功し、財をなしたのである。

これを見ていたほかの村人たちも「よし、おれもウシの数を増やそう」と思い立ち、その結果村の共有地で放牧されるウシの数が激増するに至った。

I、共有地の面積にはかぎりがあり、そこで育つ牧草の量にもかぎりがある。やがて牧草は食^くべつくされ、ウシたちはみんな飢^うえ死^しにしまった。結局村人たちはみなお金を損して、不幸になってしまった。これが共有地^Aの悲劇^Aという寓話^{ぐうわ}である(ギャレット・ハーディンという有名な環境^{かんきやう}科学者の著作に登場するお話だ)。

共有地の悲劇の寓話^①がキョウミ深いのは、人間が環境問題を引き起こすメカニズムの核^{かく}心^{しん}をついているからだ。この物語の登場人物は、けっしてバカではない。それどころか、みんな毎日を精^{せい}いっぱい^②に生き、なんとかして自分や家族のくらしをゆたかにしようと知恵をしばり工夫をこらしているのだ。彼^{かれ}らはバカじゃないから、ウシの数が増えすぎたらやがて牧草が食^くべつくされて悲劇^②が起こることも予期している。しかしそれでも、彼らはウシの数を減らさない。どうせ自分が減らしたって、ほかの村人がどんどんウシの数を増やすのが目に見えているからだ。将来はこのゲームの参加者全員が敗者になることが分かっている、いまこの瞬間^{しゆんかん}、お金を稼^{かせ}ぐのをやめられないのである。こういう現象は、寓話の世界だけでなく、現実に起こっている。たとえば現代の日本でも。

最近、ニホンウナギが絶滅^{ぜつめつ}危^き惧^く種^{しゆ}に指定された。日本人が土用^{どよう}の丑^{うし}の日などに好んで食べるウナギだけど、近年では数が極^{きよく}端^{たん}に減って、絶滅^{ぜつめつ}危^き惧^く種^{しゆ}になってしまったのである。その原因はいろいろあるんだけど、最大の原因は「獲^とりすぎ」である。食用のウナギといえは養^{よう}殖^{しよく}モノが主流^{しゆりゆう}だけど、ウナギの完全養殖はまだまだ実験段階だ。飼育下のウナギにタマゴを産ませてふ化させて、稚^ち魚^{ぎよ}を成魚になるまで育てるのを完全養殖というが、それはとてもむずかしいことなのだ。じゃあどうやってウナギの養殖をしているかというと、海で自然にふ化してあるていどのサイズまで成長したウナ

ギの稚魚(シラスウナギ)が海から川にもどってくるところをつかまえて、養殖池に投入して大きくなるまで飼育するのだ。これがウナギの養殖の実態である。

このシラスウナギ漁は、たいへん儲かる仕事である。まっくらな夜中、集魚灯のあかりにおびき寄せられるウナギの稚魚を網ですくう。これだけで一晩に数十万円もの儲けになることもあるらしい。なんせ、シラスウナギは俗に「白いダイヤ」と呼ばれるくらいで、この漁はお金の儲かる仕事。そして夜陰に乗じてやる仕事だけに、正式の許可を得ていない密漁者が後を絶たない。こうして日本じゅうでシラスウナギの乱獲が行われ、ウナギが激減するに至ったのである。

〈 中 略 〉

読者のみなさんは気づいたことだろう。共有地の悲劇が生じるのは、収奪されるタイショウ物が公共の場所にあり、誰かの所有物ではない場合である。公共物と私有物の違いはたいへん重要で、この違いが共有地の悲劇の発生を決定づけている。ひとつ例を考えてみよう。現代の日本において、肉牛は私有物である。野良犬みたいな野良牛がそのへんを歩いて、誰の持ち物でもない、なんてことはあり得ない。Ⅱ、ウナギと異なり肉牛の繁殖法は確立されている(飼育下で子ウシを産ませて成長させることが可能だ)。Ⅲ 肉牛は、完全に私有物として管理されているのである。

ここで、もし松坂牛のステーキを食べることがⅣの大ブームになって、肉が高く売れるようになったらどうなるか考えてみよう。松坂牛の生産者組合は「いまだけ儲かればいい」と考えてすべての牛を出荷してしまうだろうか。そうだと、松坂牛は絶滅し、血統が途絶えてしまう。もう松坂牛でお金を儲けることはできない。Ⅳ そんなバカなことは絶対にしないのである。

そう、いくら松坂牛がブームになって高く売れるからといって、親となる牛たちまでみんな出荷して食べちゃう、なんてことはない。牧畜業者のみなさんは後先考えて、種ウシと母ウシに繁殖させて子ウシを産ませるから、松坂牛ブームがどんなに盛り上がりながらも松坂牛が絶滅することはない。むしろ、お金を儲けようと松坂牛の飼育をはじめると、ウシの個体数は増えることだろう。シラスウナギに起こっている悲劇との決定的な違いをわかってもらえるだろうか。

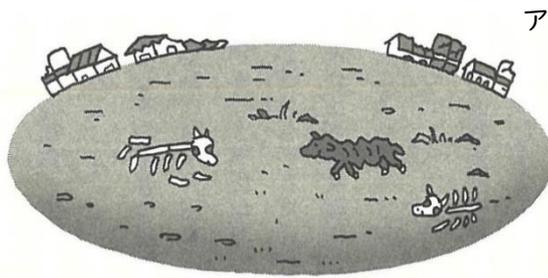
(伊勢武史『2050年の地球を予測するー科学でわかる環境の未来ー』)

問一 ――線部①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

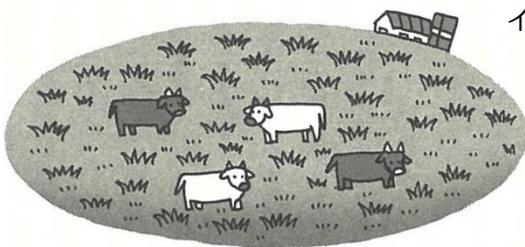
問二 本文中 I ～ IV にあてはまる語句としてそれぞれ適切なものを、あとのア～キから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア つまり
- イ そして
- ウ だから
- エ たとえ
- オ しかし
- カ あるいは
- キ ところで

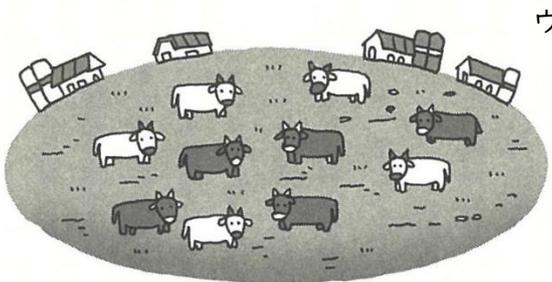
問三 ――線部A「共有地の悲劇」とありますが、次のア～ウの絵を共有地の悲劇が起こる順番に並びかえて、記号で答えなさい。



いずれ資源(牛)が枯渇=共有地の悲劇



共有地での牛の放牧



牧草が枯渇

問四 — 線部B「ウナギの養殖の実態」とありますが、ウナギはどのような方法で養殖されていますか。その理由もふくめて五〇字程度で説明しなさい。また、解答には次の語句を必ず使いなさい。

成長 養殖池

	20	
40		
		10
	30	
50		

問五 — 線部C「公共物と私有物の違い」とありますが、「公共物」と「私有物」とはそれぞれ具体的に何でしょうか。農村の例の中から書きぬきなさい。

問六 本文中 X には、「今までに一度もなく、これからも起こらないと思われる、ごくまれなこと」という意味の四字熟語が入ります。その四字熟語として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 以心伝心
- イ 前人未踏
- ウ 空前絶後
- エ 付和雷同

問七 — 線部D「決定的な違い」とありますが、この違いについて左のように説明しました。空白に入る言葉を本文中より書きぬきなさい。

お金を儲けようと が増えて、ウナギが したのに対して、松坂牛はお金を儲けようとたくさんの子ウシを ことでウシの個体数は 。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誕生日会があると、必ず「恩知らず」問題が起こった。特別に仲のいい子じゃなくても、呼ばれたらそのお返しに、自分の誕生日に呼ばなきゃいけない。そうしないと「恩知らず」のレッテルを貼られ、みんなの冷たい視線にさらされなければならなかった。みゆきちゃんは前に呼ばれたひげ子と呼ばなかった。ひげ子は本当の名前はしげ子というのだが、顔のすごさからそういわれていた。見るからに意地悪そうな顔をしていて、やっぱり意地悪だった。四角い岩石のような顔に、ドイツ軍のヘルメットのようなおかつぱ頭。眉毛がゲジゲジの上に眉間まで毛が生えていて、一本にながっていた。鼻の下にはうっすらとひげまで生えている。家は大地主で、ものすごい金持ちだったが、私たちは彼女のおかげで成金ということばを知ったのだった。彼女は誕生日会にクラス全員を呼んだ。クラス全員に恩を I のだ。気の弱い子は仕方なくひげ子も招待するのだが、彼女は金持ちのくせに、ろくなプレゼントを持ってこないと評判になっていた。近所の駄菓子屋で売っている五十円のセルロイドのキューピー。いつも同じで、それよりももっと値段の高いお返しを平気で持って帰った。誕生日会に来るたびに彼女はもうけていると噂になっていたのである。みゆきちゃんが彼女を呼ばなかったのも十分にわかるのだが、ひげ子はそのことをずーっと II に持ち、次の日からクラスの女の子を休み時間集めて、

「私はちゃんとして誕生日会に呼んであげたのに、呼んでくれなかったの。ああいう人のことを恩知らずっていうのよ」と憎たらしそうにいった。そして二か月たっても三か月たっても、事あるごとに恩知らずといひ続けた。みゆきちゃんはそれに耐えきれず、

「誕生日会に呼ばなくて、ごめんなさい」とあやまって、やっと許してもらったのだった。

私は「恩知らず」なんて絶対にいわれなくなかった。そんなことを二か月も三か月もいわれたら学校になんか行けない。もう一度、ノートをじつと見つめた。ポツとオオタ君の顔が浮かんだ。

「来てくれると、うれしいなあ」

好きな子と呼ぶのも、お誕生日会には欠かせなかった。あとで噂になるとまずいので、彼の友だちとカムフラージュのためにワン・セットにするのがテクニックである。オオタ君と彼の友だちのシマダ君の名前が加わった。よしこちゃんに聞いた、いいプレゼントの品物を持ってくる人も書き

加えた。別に仲はよくないけれど、プレゼントだけもらいたいためだ。オオシマ君のお父さんは貿易会社をやっていて、彼はプレゼントに外国の物を持ってくるので、お誕生日会の招待回数第一位だった。そしてもう一人、フクダ君がいた。彼のお母さんは人形教室の先生で、立派なお人形を持ってくるのが女の子たちの間で評判になっていた。女の子たちにはオオシマ君もフクダ君も不細工でいやらしくて人気がなかったが、プレゼント目当ての私たちには欠かせないメンバーになっていたのである。次には「X」予防のための人たちの名前が並んだ。特別、仲がいいわけじゃない名前が、ずらずらと並んだ。来てくれなくてもかまわない子ばかりだったが、そのどうでもいい子たちは九人になった。

「あの子も呼ばなくちゃ……」

A
ふるえる手でノートに「ひげ子」と小さく書いてやった。

彼女は私たちが誕生日会の話をしていると、いつの間にかそばに寄ってきていた。嫌だから、そろりそろりと場所を変えても、ずっとさぐるような目つきをしながら、あとをくつついてきた。

「ちよっと、何の話してたのん？」

私たちは知らんぷりをした。

「誕生日会のことでしょ」

知ってるなら聞くなといったかったが、私たちは黙っていた。

「違うよ」

れいこちゃんは勇敢にも、きっぱりいきった。

「へへへ。知ってるよ。あなたの誕生日くらい」

ひげ子はそういいながら、ひげの生えた口元をゆがめてにたと笑い、どこかにいってしまった。

「やーね、あの人」

私たちはこそこそ集まって、ひげ子の悪口を山のようにいい合った。

みんなが嫌だけど、彼女を呼ばざるをえない立場に追い込まれていたのに、れいこちゃんは誕生日会を、仲良し四人組だけでお祝いした。

「今日のことは私たちだけの秘密よ」

本当に仲のいい子たちだけでお祝いするのは、とても楽しかった。ハンバーグを食べながら、シンちゃんはいちちゃんが好きなんだよ、とか、三年二組の大岩先生は事務の川口さんと結婚するらしいとか、噂話をしてゲラゲラ大笑いしていた。笑い上戸のみゆきちゃんは、畳の上たたみにひっくりかえって笑い、座卓ざたくの脚あしに頭をぶつけたが、それでも目いっぱい涙なみだをためながらまだ笑っていた。私たちはひっくり返っているみゆきちゃんの両手を引っぱって、起こそうとした。あはははと笑いながら体を起こした彼女は、ふと窓のほうに目をやった。

「……!!」

窓を指さして目と口を大きく開けたまま、声もなくみゆきちゃんの体は固まってしまった。私たちはおそろおそろ窓のほうをふりかえった。

「ひゃーっ!!」

びっくり仰天ぎょうてんした。そこには頭に大きなピンクのリボンを結び、ぬぼーっと立っているひげ子の姿があった。はしゃいでいる私たちを非難するかのように、ものすごく怖い目つきをしている。そっとれいこちゃんのほうを見ると、泣きそうになっていた。

「どうしよう……」

せっかく四人で楽しくやっていたのに。顔を見合わせて私たちはうろたえてしまった。窓の外からふっとひげ子が消え、

「ごめんください」

という声があった。れいこちゃんのお母さんが玄関げんかんに走っていき、ひげ子を持って部屋に入ってきた。

「せっかく来てくれたから、仲良く遊びましょうよ、ねっ」

事情を知らないお母さんは、うつむいている私たちの頭の上でそういった。

「はい、プレゼント」

やっぱり五十円のキューピーだった。私たちが一気に暗くなったのにもかかわらず、ひげ子はお母さんが持ってきてくれたハンバーグをむしゃむしゃと食べ、シヨート・ケーキもいちばん大きいのをまっさきに取ってしまった。こいつが呼びもしないのに来たから、ケーキの分け前Bが四分の一から五分の一に減ったのだ。

御飯ごとおやつを食べて、トランプをやることにした。もちろん勝手にやって来たひげ子は参加する資格はない。私たちは完璧かんぺきに彼女を無視して、わざと楽しそうな声をあげながら神経衰弱すいじやくをしてやった。ひげ子Cは口をへの字に曲げて、ぶすっとして座っていたが、急に、

「あたし、帰る」

と立ち上がった。私たちは彼女の方を見ないで、バイバイと手を振った。お腹の中で、とっとと帰れと叫んでやった。

「おばさん、おばさん」

ひげ子は廊下に出て大声でれいちゃんのお母さんと呼んだ。

「はいはい」

「あたし、帰りますから、お返しを下さい」

「はっ？ あっ、そう、そうね。ちよっと待ってね」

パタパタという音が遠ざかり、しばらくしてまた近づいてきた。

「はい、どうもありがとう」

私たちは神経衰弱の手を休めて、二人の様子をうかがった。

玄関の戸が閉まる音がしてホツとしたのも束の間、それからが修羅場になった。れいこちゃんは、

「どうしてひげ子を家に入れたの」

とお母さんに泣いて怒り出した。準備していたプレゼントのお返しのかわりにお母さんがれいこちゃんが大切にしまっていた、かわいいバラの花の石けんを勝手に上げたことがわかって、また大泣きした。横でむなしい親子喧嘩を聞いていた私たちはいたたまれなくなり、れいこちゃんを慰めるよりも自分がその場にいることが嫌で、Ⅲと帰ってきてしまった。図々しいひげ子のせいで、れいこちゃんの十一歳の誕生日会は台無しになったのである。

私の誕生日会を成功させるために、それから毎日、宿題をやる時間を削って、呼ぶ人を誰にするか検討した。漢字の書き取りをやっている、このことが頭に浮かぶとどうしようもなくなり、バレリーナのノートを開いた。学級名簿をにらんで○をつけたり×をつけたりした。そしてどうしてもこれ以上、少なくできない人数で十五人。最終選考にもれた子たちの名前をみると、みんなおとなしくて陰で悪口なんかいわない子ばかりだった。彼らは自分が呼ばれなくても、

「いっよ、いっよ」

といってくるに違いない。誕生日会に来る子の名前を見ていたら、本当に仲のいい子及び仲よくなりた子、いいプレゼントを持ってくる子、そして呼ばないとあとがうるさい子の三つに分けられた。こうしないと私の立場が悪くなってしまふのだ。いつのまにかお母さんが背後からのぞきこんでいた。

「そんなことばかり熱心にやって。で、何人呼ぶの？ ちらし寿司とケーキがあればいいんでしょ」

お母さんは面倒くさそうにいった。

「えーとねー、十五人……」

私がそういったとたん、彼女は、

「げっ」

といい、顔色が変わった。

「仲のいい友だちって、そんなにたくさんいるの。いちばん仲のいい子でいいのよ。ほら、れいこちゃんやみゆきちゃんやよしこちゃんだけでいいじゃない。だいいち、そんなに来たって、こんな狭いうちに入りきれるかどうか、わからないわよ」

お母さんはやたらと早口で、部屋の中を見回した。そして、十五人を呼んだら、お返しも同じ数だけ用意しなければならないのだから、得だと思っても実は損なのだもいった。しかし私の頭の中は十五人からもらえる、十五個のプレゼントのことしかなかった。あとのことなどどうでもよかつたのである。

「人数は少なくねー」

お母さんはそういって。パタンとふすまを閉めて出ていった。だけどいくらクラスの子の名前をながめても、人数は削れなかったのだった。

結局、十五人に「お誕生日会の招待状」を渡した。

「十五人なんて、いったいどうしたらいいの。あーあ、お給料日前だっていうのに、あーあ」

お母さんは嫌味ったらしく、いつまでも困ったといていた。別に私は給料日前を選んで生まれたわけじゃない。生まれてみたらそうだったんだから、これはお父さんとお母さんが悪いのだ。しかしここでずっとお母さんにヘソを曲げられ、当日の料理に手を抜かれたら、えらいことになる。

私はいわれることに何でもはいはいと返事をして、この難関をのりきろうとした。E 会がうまくいけば、それでいい。その日までは私は何をいわれて

問四 — 線部B「ケーキの分け前が四分の一から五分の一に減った」とありますが、ケーキの分け前は何パーセント減りましたか。その数字を漢数字で答えなさい。

問五 — 線部C「ひげ子は口をへの字に曲げて、ぶすっとして座っていた」とありますが、その理由として最も適切なものを、それぞれ次のア〜エから選んで記号で答えなさい。

ア プレゼントを持ってきたのに、お返しがもらえなかったから。

イ れいこちゃんに誕生日会に呼んでもらえなかったから。

ウ シンちゃんは自分のことではなく、れいこちゃんのが好きだと知ったから。

エ 自分を無視して、楽しそうに神経衰弱をしているのが不満だったから。

問六 — 線部D「本当に仲のいい子及び仲良くなりたい子」とあるが、そのメンバーに含まれる友だちを次のア〜オからすべて選んで記号で答えなさい。

ア オオタ君 イ れいこちゃん ウ フクダ君 エ よしこちゃん オ オオシマ君

問七 — 線部E「この難関」とはどんなことを指していますか。本文の言葉を使って答えなさい。